対人援助職者の資質に関する一試論（第２報）
内面的資質および外面的資質についての考察

飯　田　昭　人

北翔大学『人間福祉研究』　第16号　2013年

人間福祉研究
Human Welfare Studies
2013　No. 16, 83－88

対人援助職者の資質に関する一試論（第２報）
内面的資質および外面的資質についての考察

飯　田　昭　人※

Ⅰ　問題の背景と目的

１．はじめに

飯田（2010）では、臨床心理士をはじめとする対人援助職者全般において、援助理論や援助技法の習得がもちろん重要ではあるけれども、それら理論や技法を用いる人間の要因の重要性を指摘した。

自戒の念を込めて言えば、いくら援助理論や援助技法を学んでも、対人援助場面にそれを生かせずにいる者も存在する。また反対に、援助理論や援助技法を学んでいる途上であっても、それなりに対人援助場面において相談者と上手にやりとりできる者もいよう。

この差について、飯田（2010）は、「資質」という概念を用いて、この資質について考察していった。

飯田（2010）では、対人援助職者の資質について、表１のように定義をした。

表１　対人援助職者の資質（飯田，2010）

心理的援助をはじめとする、さまざまな援助サービスを行っていく者の、元来備わっている性質や素質、才能などを、自らの生きる過程において磨いていくこと

この「資質」という概念を大きく分けて次の２つであると考えた。

①「元来備わっている性質や素質、才能など」という事柄を「広く乳幼児期や児童期、思春期や青年期などにおいて、親や家族、その他の自分の周囲の人間とのかかわりの中から得られたもの」と想定した。

②「自らの生きる過程において磨いていくこと」という事柄を、「自ら得てきたさまざまものをさらに自分自身研鑽を積んで深めていったり、周囲とのかかわりの中からさらに磨いていったりしたもの」と想定した。

つまり、臨床心理士などの対人援助専門職を目指すうえで、もしくは対人援助専門職の資格取得後も援助理論や援助技法についての飽くなき研鑽を積んでいかなければならないが、それと同時にそれを用いる人間の資質についても磨いていかなければならないと考える。

本研究では、その資質について、性格（気質）研究と熟達化研究を取り上げることとする。

２．研究の目的

上述した①および②のうち、まず①の「元

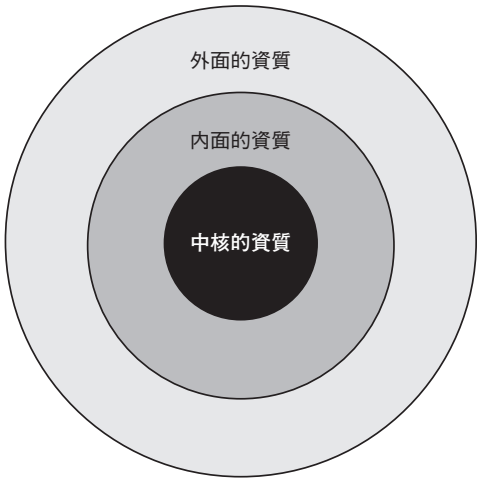
※人間福祉学部福祉心理学科

キーワード：対人援助職者の資質、性格・気質、熟達化、内面的資質、外面的資質

来備わっている性質や素質」について迫っていくために、性格（気質）研究を概観し、考察していくこととする。続いて②の「自らの生きる過程において磨いていくこと」について迫っていくために、熟達化研究を概観し、考察していくこととする。

なお、本研究の理論モデルとしては、図１のような概念図を想定している。

図１　資質の概念図



注）３つの円の厚みはその人その人によって異なっている

まず一番中心にある「中核的資質」とは、その人に生来的に備わっているもので、本研究では「気質」と同義語として用いることとする。その「中核的資質」の周囲にあるものが「内面的資質」であり、乳幼児期や児童期、思春期や青年期などの家族関係、友人関係などの周囲との関係の中で形成されていったものを想定している。その「内面的資質」の周囲にあるものが「外面的資質」であり、大学や大学院、その他職場での学びなどから身につけていったもので、援助理論や援助技法を学ぶなどもこれに含まれる。

そして、モデルとしては三重の円になっているが、その境界ははっきり区別されるものというよりはあいまいなものであると考えている。

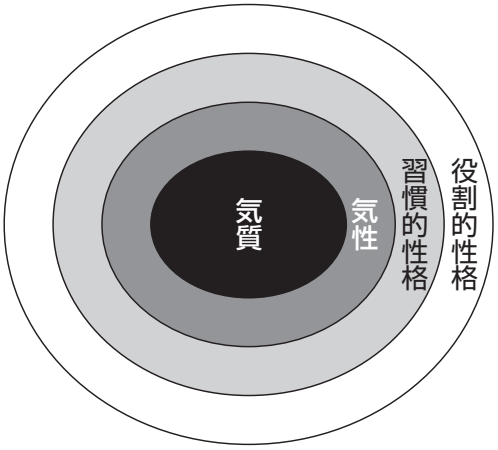
本研究で取り上げる「性格（気質）研究」は、「中核的資質」および「内面的資質」についてを、「熟達化研究」は「内面的資質」および「外面的資質」を明らかにする概念であると想定している。

Ⅱ　「性格（気質）研究」から「元来備わっている性質や素質」について考える

１．丹野（2009）の「性格の層構造」からの考察

丹野（2009）は、宮城（1998）の「性格の層構造（図２）」を参考にしながら、「性格」について述べている。以下、丹野（2009）の論考を述べていく。

図２　性格の層構造（宮城，1998）



丹野（2009）は性格について、「遺伝的に備わっている側面もあり、そして自分の意志で変えたり形作っていったりという側面もあり、また家庭や対人関係を通じて環境的に形

作られる側面もある」と述べている。

そして、その性格を図2のように考えることができるとしている。

最も中心にあるのが「気質」であり、これは生物学的に決められた割合が多い部分とし、新生児にも扱いやすいタイプ・扱いにくいタイプなどの気質の違いがみられると述べている。

次に「気質」の周りにあるのが「気性」は、幼少期に家庭内の関係で作られるものであり、長子と末子のような、出生順位によっても性格が異なることが知られているとしている。

そして、「気性」の周りにあるものが「習慣的性格」であり、友人との生活や学校環境などによって作られるとしている。

最後にもっとも外面にあるのが「役割的性格」であり、職場や家庭内でふるまう役割に従って作られるもので、さまざまな対人関係の中で決められている性格も大きいと述べている。

丹野（2009）は上記の説明によりさらに「内側のものほど、先天的・遺伝的に決められた面が強く、一貫性が高く、なかなか変わらないといえる。外側のものほど、その人のおかれた社会的な状況によって決められる面が強く、一貫性は低く、変えるのは容易である」と指摘している。

筆者の考える対人援助職者の資質も、この丹野（2009）が宮城（1998）の「性格の層構造」を用いて説明した論考に非常に近いものである。

筆者が想定している「中核的資質」は、丹野のいう「気質」に近いものであり、生来的に備わっているか、もしくは次の「気性」もやや含む、幼少期の家庭内の関係で形成されるものと考える。

続いて、「内面的資質」については、上述した「気性」や「習慣的資格」など、その人の家庭生活や学校環境などの関係から形成されるものだと考える。

最後の「外面的資質」についてのみ、「役割的性格」とは必ずしも合致しないと考える。ただ広く、職場や家庭、その他自分の与えられている役割の中で形作られるものが「役割的性格」であるならば、「外面的資質」も対人援助業務に必要なさまざまな「役割」を学んでいくことであるので、「役割的性格」も「外面的資質」を考えるうえで参考にはなる。

2．気質（temperament）研究からの考察

一般的に「気質」とは、乳児の生後まもなくから観察できる行動上の個人差を指す。

菅原（2003）は、気質の概念を表2にある4点を指摘している。ただし、文末の表現などは筆者が加筆修正している。

表2

①　発達初期より出現する行動上の個人差
②　ある程度期間持続し、その期間内では類似した状況で一貫する傾向をもつ。
③　体内や外界のさまざまな環境要因と相互作用によって変化したり安定化したりする
④　個人のパーソナリティの最初期でのプロフィールを形成するもの＝「行動上の個性の初期値」

Thomas ら（1980）によるニューヨーク縦断研究（NYLS）では、乳児の日常場面での行動特徴を9つの気質的特性（活動水準、周

期の規則性、接近・回避、順応性、刺激に対する閾値、反応強度、気分の質、気の散りやすさ、注意の範囲と持続）で評定し、さらにこの９つの気質的特性の組み合わせから、①Easy Child,② Slow-to-Warm-Up Child,③Difficult Childの３つに分類し、それぞれ40%、15%、10%であると報告している。ちなみに、この分類に入らない平均的な子どもが35%いることを報告している

つまり、氏－育ち論争でいうところの、「氏」の要因がこれらの気質研究においては優位であることを示しているといえる。

つまり、筆者の想定する「中核的資質」もこの気質研究にならえば、その人本人が持っている生得的要因や乳児期の親子関係などの要因が重要であると推察できよう。

Ⅲ　熟達化研究から「自らの生きる過程において磨いていくこと」について考える

熟達化については、「経験による高次のスキルや知識の獲得（楠見、2010）」をさす。熟達化には、10年ルール（「各領域における熟達者になるには最低でも10年の経験が必要である（松尾、2006）」）と呼ばれる長い時間が必要といわれている。

楠見（2010）は熟達には３つの段階があるとし、①定型的熟達（初任者が熟達者のコーチングを受けて、仕事についての手続き的知識を蓄積することによって、定型的な仕事ならば、速く、正確に、自動化されたスキルによって実行できる段階である。しかし、新奇な状況での対処はうまくいかないことがある）、②適応的熟達（仕事に関する手続き的知識を蓄積し構造化され、仕事の全体像を把握できる。そして、状況に応じて、知識を柔軟に適用できる段階である。状況を越えた類似性認識、つまり類推によって、過去の経験を生かすことができる）、③創造的熟達（すべての人が到達する段階ではない。一部の適応的熟達者がさらに豊かな経験を重ねることによって、暗黙知を獲得し、状況の深い分析と新たな手順や知識を創造できる段階である）とそれぞれ3点について述べている。

松尾（2006）はDreyfusをもとに、管理職が熟達するプロセスを次の５段階で説明している。①初心者は、職務に関関連する事実やルールは学ぶが、具体的な経験は積んでいないため、知識は文脈や状況と切り離されている。そのため、初心者のパフォーマンススピードは遅いとされている。②上級ビギナーは、現実場面の経験を積むことで、直面している状況に関する重要で微妙な特徴に気付くようになる。こうした状況の違いを考慮して意思決定ができる段階であるとされている。③一人前は、さまざまな選択肢から目標を設定し、計画を立て、アクションをとることができるようになる。具体的な経験を積む重ねることで、アクションプランを選択するのも容易になるとされている。④上級者では、豊富な経験を通して典型的な状況についての知識を獲得し、状況を「包括的・全体的（holistic）」に見ることができるようになるとされている。⑤熟達者の特徴は、「直感的に意思決定」することができる点にある。素人から上級者の段階まで、意思決定は合理的に行われるが、熟達者は、状況やアクションに関する膨大なレパートリーを有するため、直感的な判断が可能になるとされている。

熟達化研究からは、本研究で想定している「外面的資質」が形成されていく過程と似て

いると考えた。援助理論や援助技法を学び身につけていく過程、すなわち外面的資質を磨いていく過程が、熟達化研究において言える、各種の段階（ステージ）を進んでいくものといえるのだと考えた。

だが、熟達化研究の多くは、その個人的要因についてはほとんど言及されていない。誰しもが同じような過程を辿るということはもちろんないはずであり、どういう個人的要因が熟達化の過程を促進もしくは減退させるのかということが課題であると考えた。

Ⅳ　若干の考察と今後の課題

1．若干の考察

筆者は冒頭でも述べてきたように、臨床心理士として対人援助業務に従事している人間であるが、単に人柄のよい援助者、人間性のある臨床家がよいというわけではないが、理論や技法を用いる人間の要因というものこそ重要であり、そういうものも相談者（クライエント）に伝わっていると考えている。だが、そのような援助者側の要因に関する研究はまだまだ少ないのが現状である。

筆者が資質という概念に着目したのは、私の周囲の恩師や先輩、同僚、後輩それも同じ職種である臨床心理士ばかりではなく、医師や教師、社会福祉士や精神保健福祉士、看護師、保健師、児童養護施設や児童自立支援施設の方々、そして資格と名のつくものは持っていない方々も含め、多くの人たちに教えられた経験が基底にある。

本研究からは、筆者が特に着目したいには「内面的資質」である。対人援助を仕事にする際、やはり人と人との関係形成が重要であり、その人その人は生まれてから現在まで、親や兄弟、友人や学校の先生、職場の人間など、多くの人間との出会いを経て、人間性を養い、そして人間観を醸成していくのではないだろうか。

筆者が図１で想定した資質の概念図についても言及する。筆者の仮説としては、この円の大きさが重要であると考える。特に円が大きくなる場合は、内面的資質の割合が大きい円となるか、外面的資質の割合が大きい円のどちらかになると思われる。

内面的資質の割合が大きい円である人々は、これまでの人間関係における気づきや経験、そして自分のライフイベントにおける出来事やそのとらえ方などによって、この資質が磨かれ大きくなることを想定している。

反対に外面的資質の割合が大きい円である人々は、援助理論や援助技法など、これら対人援助業務に関するさまざまな学びによって、この資質が磨かれ大きくなることを想定している。

筆者は、この内面的資質と外面的資質が相補的なものであると考えている。どちらか一方だけの割合が大きい円よりもバランスのとれた割合での大きい円であることが望ましいと考えている。

対人援助職者は、自分自身の過去および現在、未来への生活からも学ぶ必要性がある（内面的資質を磨く）とともに、飽くなきまでに研鑽を積むことを怠らず（外面的資質を磨く）にいることが求められると考える。

2．今後の課題

明らかに本研究はショートレポートであり、検討した文献数が少なすぎた。また、資質の仮説も根拠に乏しく、理論的補強がほとんど

ないものとなってしまった。

今後はより多くの文献を渉猟し、本研究の知見について再検討していきたい。

Ⅴ．文　　献

1．飯田　昭人（2010）対人援助職者の資質に関する一試論～心理的援助における援助者側の要因に焦点を当てて～　人間福祉研究第13号

2．楠見　孝（2010）大人の学び～熟達化と市民リテラシー～　佐伯胖監修「学び」の認知科学事典

3．宮城　音弥（1998）性格類権論におけるパーソナリティの理解　詫摩武俊編　性格日本評論社

4．松尾　睦（2006）経験からの学習～プロフェッショナルへの成長プロセス～　同文館出版

5．菅原ますみ（2003）個性はどう育つか　大修館書店

6．丹野　義彦（2009）性格心理学　丹野義彦他　臨床と性格の心理学　岩波書店

7．Thomas, A. & Chess, S.（1980）The dynamics of psychological development. New York：Brunner/Mazel.（林雅次訳 1981　子供の気質と心理学的発達　星和書店）